琉球大学学術リポジトリ

琉歌に歌われた「老い」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法学部 公開日: 2013-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前城, 淳子, Maeshiro, Junko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/26036

琉歌に歌われた「老い」

前城淳子

琉歌を歌われた内容によって大まかに分類すると、四季歌、恋歌、雑歌の三つに分けることができる。四季歌は季節ごとの風物や季節の推移によって生じる抒情主体の〈こころ〉を、恋歌は恋の相手との関係や恋するわたしを取り巻く状況によって生じる抒情主体の〈こころ〉を描く。この四季歌と恋歌を除いたものが雑歌であり、人生の中で遭遇するさまざまな出来事や状況の中で生じる抒情主体の〈こころ〉が描かれる。嘉味田宗栄氏は琉歌の雑歌について「習俗・信仰・風土・歴史社会と密接につながり」、「誦詠・おもろ・その他の先行文学の面影をとどめ、その連続と見られるもの、いわゆる琉球的なものは、むしろこの「雑」の方に姿をかえつつ生きている。」[1]と述べている。琉歌のジャンルとしての特徴を明らかにするためにも、琉歌の雑歌がどのような主題で構成されているのかを明らかにすることが必要となるだろう。暫定的な分類ではあるが、雑歌を、祝い（御代、豊作、航海安全、長寿、疱瘡、正月、祝い一般）、風土・名所、羇旅、哀傷、懐旧、老い、不遇、教訓、狂歌[2]に分けておくことにする。この中から今回は「老い」を取り上げ、琉歌で「老い」がどのように描かれているのか見ていきたい。

琉歌で老いは、年を重ねる、年波が寄る、年波が立つ、見た世が長くなり見ない世が短くなる、のように、年が積み重なっていくことで示される。また、頭や髪に雪が降る、髪に霜が降る、顔が朽ち木になる、杖を突くなどの身体の衰えや、恋に無関心になるといった心の変化によって自覚される。

長寿の祝いの歌には「面て波立て白毛雪かめて　耳も目も叶て百十長はれ（面は波を立てて白髪雪を戴いて耳も

目もしっかりして百年いらしてください。)」(琉歌百控・三八六)と、白髪の他にも顔の皺が老いの形象として描かれている。また、儀礼歌謡のウムイでは、羽が生え、老斑が生じ、杖を突くことが長寿の象徴として描かれている。

19あやざばに　綾差羽
20しるざばに　白差羽
21みいかろーか　萌え変わるまで
22いしくじま　石くじま
23かにくじま　金くじま
24ういかろーか　生え変わるまで
25いしぐさに　石御杖
26かにぐさに　金御杖
27ちききろか　突き切るまで
28ぬききろか　貫き切るまで
〔ウムイ　三八〇　新しく神になった人へのオモロ(大宜味村喜如嘉)〕[3]

羽が生えるというのが具体的にどのような状態を表すのかよく分からないが、長寿を表すもののようである[4]。「くじま」は老人の顔にできる染みのことで[5]、それが生じることで長寿を表している。

長寿の祝いの歌やウムイの場合、顔の皺や老斑、杖を突くなどの身体的な衰えを描くことで、そのような状態に

なるまでの長い期間ある状態が続いていることを表している。一方、琉歌の「老い」の歌では、自らの「老い」に直面することによって生じる心が表現される。老いを受け入れ肯定的にとらえるものもあるが、多くは老いを忌避し嘆くものである[6]。

「老い」を歌った琉歌を主題によって分類すると、①年をとったのが恨めしい、②年をとりたくない、③若い頃に戻りたい、④心は若い、⑤しみじみと老いを思う、⑥昔を思い出す、⑦老い先が短い、⑧年を取ったのでゆったりと過ごそう、の八つのグループに分けられる。

以下、この分類にそって「老い」を詠んだ琉歌を見ていくことにする。対象とする琉歌は『南島歌謡大成Ⅱ沖縄篇下』[7]と琉球大学附属図書館伊波普猷文庫蔵『南苑八景』[8]に収録されているものである。

1. 年をとったのが恨めしい

老いることは止めることができない。自分の思いのままにならないことであり、「老い」に対して「恨めしい」と嘆くしかない。思いもよらずとった年が恨めしい、杖を突く年になったのが恨めしい、昔の恋人の話を他人ごとのように聞く年が恨めしい、静かに対応する年が恨めしい、と表現される。

きのふよけふよとめはいな昔なるゑ　覚らすによたるとしの恨しや　（古今琉歌集・一一四〇）

〔昨日か今日かと思えばもう昔になるのか。思いもよらず寄った年が恨めしい。〕

わらへしよて乗る竹馬はなまに　くしやんつく年のよたる浦めしや　（天理本琉歌集・二四二・蔡氏玻名城親雲上）

〔子どもの頃に乗った竹馬は今となっては杖をつく年になったのが恨めしい。〕

次の二首は、一句目が「昔袖振る」と「むかしなれそめの」と異なっているが、「袖振る」は袖を振って愛情を示す行為、「なれそめ」は男女が情けを交わし馴染むことである。いずれの歌も、昔の恋人の話を他人ごととして聞く年になったことを嘆いている。作者がどちらも与那原親方となっており、同じ歌の異伝であろう。

昔袖振る花の物語　与所に聞成よる歳の浦めしや　（琉歌百控・四四七・与那原親方）

〔昔袖を振った花の物語を他所のこととして聞く年が恨めしい。〕

むかしなれそめのはなのものかたり　与所にききなしゆる年の恨しや　（古今琉歌集・二八四・与那原親方良矩）

〔昔情けを交わした花の物語を他所のこととして聞く年が恨めしい。〕

次の歌では恋に対して静かに接する年になったことを嘆いている。

浮世なれそめのわかこころなけな　しつかもてなしゆる年のらめしや　（古今琉歌集・三六二・本部按司朝救）

〔浮世で情けを交わした我が心にも関わらず静かに接する年が恨めしい。〕

『古今琉歌集』は二八四番と三六二番の歌を「恋」の部に入れている。どちらの歌も、昔の恋が歌われているが、歌の主題は恋ではないだろう。恋に対して関心を持てない年になった、恋に対して冷静に接する年になった、と「恋」

に対する私の心の変化によって「老い」を自覚し、年をとったことを恨めしいと嘆いているのである。

老いらくの恋は琉歌でも「髪に白雪の積る年見ちも　忘らぬ物や恋ぬ道か（髪に白雪が積もる年になっても忘れられないものは恋の道であろうか。）」（天理本・五四七）や、「このころにあれか沙汰かしちくいゆら　いらぬ年寄のゆめにみゆす（この頃あの人が私の噂をしてくれるのだろうか、無用の年寄りの夢にあの人を見るのは。）」（古今・一〇七五）のように歌われる。明治期の題詠琉歌にも「老恋[9]」「老人恋[10]」「老人初恋[11]」題での題詠が見られる。老いらくの恋を詠んだ歌では、年をとっても恋が忘れられない、年寄りになっても恋をしている、のように老境に入った者の恋が描かれている。

2．年を取りたくない

過ぎる月日を引き止めたい、年波が寄らないで欲しい、年が寄らないようにシャコ貝を植えよう、寄る年は戻ってほしい、と「老い」を忌避し年を取りたくないという心が描かれる。

次の歌では、月や太陽、月日が過ぎることで時間の経過を示して年を取ることを表している。時間が過ぎるのを止めたいと歌うことで、年を取りたくないという願望を表現している。

若狭大道に引よ留め置な　空に行過御月御日　（琉歌百控・四七一）

〔若狭の大通りに引き止めて置こう、空に行き過ぎるお月さまとお日さまを。〕

若狭は那覇の地名であり「若さ」に通じることから「若狭大道」は若い盛りの頃を意味する。その「若狭大道」に月や太陽を繋ぎ止めておきたいと歌うことで、若い盛りのままでいたいという心を表現している。

次の歌では、過ぎる月日を繋ぎ止めておきたい、と歌われている。年を追うごとに白髪になるので月日を繋ぎ止めて更なる老いを止めたいというものである。

年毎にかしら雪ど降りつもる　つなぎとめおかな過ぎる月日　（琉歌全集・二三二六・喜屋武按司朝教）

〔年ごとに頭に雪が降り積もる。繋ぎ止めておきたい、過ぎる月日を。〕

次の歌では、年波が寄る、年波が立つことで年を取ることを表している。年波が寄らない港に繋いでおきたい、いつも年波が寄らないでほしい、どうして年波が激しく立つのだろうか、と年を取ることを忌避する心が表現される。

年波の寄らぬ港口とまいて　浮世こぐ舟やつなぎおかな　（琉歌全集・二六二六・宜湾朝保）

〔年波が寄らない港を探して浮世を漕ぐ舟は繋いでおきたい。〕

百歳の渡中しからみはたてて　いつもとしなみやよらぬあらな　（古今琉歌集・二三七・漢那親雲上庸森）

〔百年の大海に柵を立てて、いつも年波は寄らなければなあ。〕

とやかくに浮世わたる身かふねに　のよてとしなみのしけくたちゆか　（古今琉歌集・二三八・漢那親雲上庸森）

〔どうにかこうにか浮世を渡る舟である私にどうして年波が激しく立つのか。〕

次の歌も年波が寄らないで欲しいという願望を表現している。名護は砥石の産地であったので[12]、その砥石（トゥシ）・年（トゥシ）が寄らないように「あさかい」を植えようというものである。「あさかい」を植物リュウキュウアオキとする説もあるが[13]、年波が寄らないようにするのであるからシャコ貝と解しても良いだろう。島袋盛敏氏は「あざ貝は他の貝類と違って、移動することは絶対にないので、境界線に立てておいて、年の寄ってくるのを永久に防ごうというのである。」[14]と説明している。

としや名護からとよよんてや聞る　首里と名護境にあさかいうへらな　（古今琉歌集・二四〇）

〔年（砥石）は名護から寄ると聞いた。首里と名護の境にシャコ貝を植えよう。〕

年波が寄らないで欲しいと歌った『古今琉歌集』の二三七番、二三八番、二四〇番の歌は「冬」の部に採られているものである。『古今琉歌集』は歳暮の感慨を詠んだものとして「冬」の部に入れたのであろう。一年の最後である年の暮れは年月の経過を強く意識させ、老いを実感させる。年の暮れの感慨として「老い」を自覚し避けたいという心が描かれている。

次の歌では袴の襞が寄っては戻るように私の年も戻ってほしい、と歌われている。島袋盛敏氏は「大袴のひだは寄ってしわくちゃになったり、のびてしわがなくなったりするが、私の寄る年波もあんなにして、より戻り戻り、しわがなくなってほしいものである。」[15]と説明しているが、ここで取り上げられているのは袴の襞であり皺ではない。私の年は袴の襞が寄っては戻るようであってほしい、と年を取りたくないという願望を歌ったものであろう。

大かかんひちややよりもとりもとり　我かよよる年もあにすあらな　（古今琉歌集・一二七六）

〔大袴の襞は寄っては戻る。私の寄る年もあのようでありたい。〕

次の歌では、老いの柵であっても老いを止めることはできない、と年をとることを嘆いている。『古今琉歌集』の「冬」の部に採られている歌であり、歳暮の感慨として老いを嘆く心を詠んだものである。四句目の「こしゅん」を『琉歌全集』は「越しゅん」と表記しているが、「漕ぎゅん」が正しいだろう[16]。明日は春という季節になることを「明日は春の浦を漕ぐ」と表現したものである。

とめてとめらぬ老のしからみも　明日やはるの浦こしゅんとめは　（古今琉歌集・二三九）

〔止めても止められない、老いの柵も。明日は春の浦を漕ぐかと思うと。〕

3．若い頃に戻りたい

老いた身を元の姿に戻したい、季節になると咲く花のように若くなりたい、昔にもどって竹馬に乗って遊ぼう、花の昔に戻ってみたい、と若い頃に戻りたいとの願望を表現する。

次の歌では、生命を再生させる若水で洗うことで元の姿を取り戻したいとの願望を表現している。「若水」は正月の早朝に汲む聖水であり、正月を祝う琉歌に「若水に面洗てわが姿　若くなて春や遊ぶうれしや」（琉歌百控・三二五）と歌われる。

老いが身の心若水に洗て　くり戻ち見ぼしや元の姿　（琉歌全集・一六三一・高江州昌荘）

〔老いた我が身の心を若水で洗って繰戻してみたい、元の姿に。〕

次の歌では、季節がめぐってくると植物が再び花を咲かせて盛りを迎えるように、人も若くなれたらよいのにと歌われている。

節す咲き出ゆる花のごと人も　若くなられゆる浮世やらな　（琉歌全集・二六二三・恩河朝祐）

〔季節に咲き出る花のように人も若くなれる浮世であればなあ。〕

短い周期で盛衰をくり返すものを取り上げ、それと同じように再び若い盛りの頃に戻りたいという願望を表現している。八重山のトゥバラーマでは月が時を経るにしたがい新月となり再び盛りの満月を迎えるように、若い頃に戻りたいと歌われている[17]。「昇る月や／年寄若がさなり／我がけえらん／若がさに戻らるば（昇る月は年を経ると若くなる、私たちも若い頃に戻れたなら。）」（『南島歌謡大成Ⅳ八重山篇』トゥバラーマ一〇九）。

次の歌は、昔に戻って若狭（若さ）大通りで遊ぼう、花の昔を操戻してみたい、と若い頃に戻りたいという願望を表現している。

竹馬のむかしくりもとしもとし　若狭大道にのやひあそは　（古今琉歌集・一〇四二・安慶田）

〔竹馬で遊んだ昔を繰り戻して若狭（若さ）大通りで乗って遊ぼう。〕

走川のことに年波や立い　繰戻ち見ほしやはなのむかし　（琉歌百控・三九三）

〔川のように年波は立つ。繰戻してみたいなあ、花の昔に。〕

次の歌では、元の姿に戻すことはできない、取った年は戻せないと歌われている。若い頃には戻れないという諦めを表現したもののようにも思われる。しかし、流れる川を戻すことはできない、先人が歩いた道である、のように動かし難いものとして「元の姿に戻せない」「取った年は戻せない」ことが描かれている。これも若い頃に戻り

たいという願望を表現したものであろう。

年や走川の流れ水心　くり戻しならぬ元のすがた　（琉歌全集・一八七）

〔年は川の流れる水のようだ。繰戻すことはできない、元の姿に。〕

よるとしやもとさらぬ　さきにあるものかふたるむかし　（天理本琉歌集・六一七）

〔寄る年は戻せない。先にある者が昔歩いた道だ。〕

よるとしのもとされめ　さきにあるものかふたるむかし　（古今琉歌集・七八七）

〔寄る年が戻せようか。先にある者が昔歩いた道だ。〕

4．心は若い

心はいつも子どもだ、心はまだ二十歳頃だ、心はまだ春の盛りだ、心は初春の花の匂いだ、いつも心は花である、心は若松の春の新芽のようだ、と年をとっても心は若いと表現する。肉体的には老いているが心は若いというのも「老い」を忌避する心を表現したものであろう。

六七十成も歳読と知る　いきやしかな肝や早晩童　（琉歌百控・四五一）

〔六七十歳になっても年を数えて知る。何故か心はいつも子どもだ。〕

心あらたまの年や重ねても　肝かしやや[18]我肝いつも童　（琉歌全集・二六七八・山里永昌）

〔心があらたまる新年は重ねていても嘆かわしいことに私の心はいつも子どもだ。〕

与所からと人の年やよらしゆゆる　きもやなまはたち内とやすか　（古今琉歌集・一二七七）

〔他人によって人の年は寄るものだ、心はまだ二十歳頃であるが。〕

かしらげの霜やいつの間に降たが　肝やなま春の盛りやすが　（琉歌全集・二二八六・太田朝敷）

〔頭の毛の霜はいつの間に降ったのか、心はまだ春の盛りであるが。〕

顔やおくやまの朽木なてをても　きもやはつはるのはなのにほひ　（古今琉歌集・一六三二・大宜味朝知）

〔顔は奥山の朽ち木になっていても心は初春の花の匂いである。〕

春ごとにつめて年や重ねても　いつもわが心花どやゆる　（琉歌全集・一〇九）

〔春ごとにますます年は重ねてもいつも私の心は花である。〕

としや秋すれてふゆかれになても　きもや若松のはるのみとり　（古今琉歌集・一二七八）

〔年は秋を過ぎて冬枯れになっても心は若松の春の新芽のようだ。〕

5．しみじみと老いを思う

いつ白髪になったのだろうか、杖をつく年にいつなったのだろう、若狭（若さ）を過ぎて気がついたら上泊（老いの泊）に来ていた、思いもよらず七十になった、この年になっているのは夢のようだ、と年を取り老いたことをしみじみと思う心を表現している。

みやま路のきくの露の間にいつし　わ身の黒髪に雪やふたか　（天理本琉歌集・五二三）

〔深山路の菊が露を受ける間に、いつ私の黒髪に雪は降ったのだろう。〕

むかしおち乗る竹馬むいまに　枝んつくとしやいつかよつたさ　（大島筆記・四一）

〔昔乗った竹馬も今となっては杖をつく年にいつなったのだろう。〕

あたら若狭町夢の間にすくち　さめて月見れはおひのとまり　（天理本琉歌集・二五八）

〔惜しまれる若狭（若さ）町を夢の間に過ごして覚めて月を見れば上泊（老いの泊）に来ていた。〕

若狭大道や覚らすに過て　醒て暁や老の泊　（琉歌百控・四七〇・慶田筑登之親雲上）

〔若狭（若さ）大道は思わずすぎてしまって覚めて暁には上泊（老いの泊）に来ていた。〕

若さ大道や夢内にすきて　覚めてあかつきや上の泊　（南苑八景・三一五・阿嘉山筑登之親雲上）

〔若狭（若さ）大道は夢のようにすぎてしまって覚めて暁には上泊（老いの泊）に来ていた。〕

浮世あだ波に浮き沈みしちゆて　覚らずに今年七十なたさ　（琉歌全集・二二七一・伊江朝助）

〔浮世の徒波に浮き沈みしていて思いもよらず今年七十才になったよ。〕

次の歌は、楽も苦しみも過ごしてこの年になっているのは夢の心地だ、と表現している。楽や苦しみを乗り越えて老境に入ったことに対して夢の心地だというのであり、老いを肯定的にとらえたものだろう。『琉歌全集』では二句目が「打ち返し返し」となっているが、作者がどちらも佐久本嗣順となっており、同じ歌の異伝であろう。

楽もくるしみもうち過し過し　このちやなてをすやゆめの心地　（古今琉歌集・一六二六・佐久本嗣順）

〔楽も苦しみも過ごしに過ごしてこの年になっているのは夢の心地だ。〕

楽も苦しみも打ち返し返し　このきやなてをすや夢の心地　（琉歌全集・二三六八・佐久本嗣順）

〔楽も苦しみも繰り返してこの年になっているのは夢の心地だ。〕

6．昔を思い出す

年をとるといっそう昔のことを思い出す、年をとるにしたがって昔のことを思い出す、戻せない年なので昔のことがいっそう恋しい、と歌われている。『南苑八景』は三七九番、三八九番、三七〇番の歌を「懐古」の部に入れている。昔を思い出し懐かしむ歌として「懐旧」の歌とすべきかもしれないが、年をとったことが私に昔を思い出させるのであり、老いの感慨を表現したものであろう。

年波の寄ればよくど覚出しゆる　あかぬ語らたる人の昔　（琉歌全集・二〇五〇）
〔年波が寄るといっそう思い出すよ、飽きずに語り合った人との昔を。〕

歳のよられ、ば詰て思われて　共に語らたる人の昔し　（南苑八景・三七九・與那原親方）
〔年が寄るといっそう思われるよ、一緒に語り合った人との昔を。〕

歳のよる儘に詰て思出ゆさ　昔語らたる人の情　（南苑八景・三八九）
〔年が寄るにしたがっていっそう思い出すよ、昔語り合った人の情けを。〕

語て恋しさや昔ことさらめ　まこと戻さらぬ年よやれば　（南苑八景・三七〇）
〔いっそう恋しいのは昔のことであろう。実に戻せない年であるので。〕

7．老い先が短い

年を取り秋の月をあと何度眺められるかと思うと名残惜しい、老い先が短く露が宿るように儚い、と先が短くなったことに対する感慨を表現している。あと僅かしか残されていないと思うと、秋の名月が名残惜しく思われ、我が身が儚く思われるのである。

年や寄詰て幾度詠ゆが　名残たちまさる秋の今宵　（南苑八景・六二四・翁長親方）
〔年が寄り先は短くなって、幾度眺めるだろうか。名残が増してくる秋の今宵である。〕

よるとしやつめて幾度なかめゆか　なこりたちまさるあきの今宵　（古今琉歌集・一〇六〇・翁長親方）

〔年はますます寄って、幾度眺めるだろうか。名残が増してくる秋の今宵である。〕

見ちやる世や長さむたぬ世やつまて　はかなしやつゆのやとるここち　（古今琉歌集・一二五四）

〔見た世は長い、見ない世は短くなり、儚いなあ、露が宿るような気分だ。〕

8．年を取ったのでゆったりと過ごそう

年を取ったので寄り集まって遊ぼう、年は戻せないので揃って遊ぼう、年を戻して若くなることはできないのでひたすら遊びなさい、年は戻せないので心を励ましてゆったりと生きよう、と歌われている。「老い」を受け入れ、緊張や苦しみから解放されて、余生を楽しくゆったりと生きようというものである。

かたて面白さ隙のあて互に　寄合て遊はなやとしやよたひ　（古今琉歌集・一六一四・親泊筑親雲上）

〔語って面白いなあ、隙があってお互いに寄り集まって遊ぼう、年も寄ったので。〕

よていきゆる年のくり戻しなるひ　見ちやる世やなかさ揃て遊は　（天理本琉歌集・二四五・鄭氏大嶺親方）

〔寄っていく年を繰戻すことが出来ようか。見た世は長い、揃って遊ぼう。〕

寄る年のもとち若なられよめ　只遊ひ召れ夢の浮世　（琉歌百控・一三）

〔寄る年を戻して若くなれようか。ひたすらお遊びなさい、夢のような浮世を。〕

次の歌の「ももき」は命の意で、「ももき延な」は「長生きしよう」の意と解されてきた。見里朝慶氏は「ももきのびゆが」の語釈で「百の息がのびる、命ののびる思いがする。方言ではいいちのぶんという。」[H]と書いている。「ももき」が「百息」からくるものだとすれば、「ももきのぶん」は「たくさんの息を延ぶ」の意で、悩みや苦しみから解放されてゆったりと息をする、ほっと安心する、の意であっただろう。

年よくりもとそみちやなひぬあれは　こころいさみとてももき延な　（古今琉歌集・一六一六・浜元親雲上）

〔年を繰戻す方法は無いので心を慰めて命を延ばそう。〕

注

1 嘉味田宗栄『琉球文学序説』（至言社　一九七九年）三九一頁。

2 玉城政美氏は琉歌の雑を「Ⅰ四季、Ⅱ恋、Ⅲ祝い、Ⅳ哀傷、Ⅴ旅・羇旅、Ⅵ風土・名所、Ⅶ懐旧、Ⅷ境涯、Ⅸ狂歌」に分類し、「老い」は「日常生活や人生のある時期における境遇を内省した歌」として「不遇」や「若さ」とともに「境涯」に分類している（「抒情歌謡について―琉歌〈恋歌〉―」『琉球歌謡論』砂子屋書房　二〇一〇年）。

3 外間守善・玉城政美『南島歌謡大成Ⅰ沖縄篇上』（角川書店　一九八〇年）

4 『沖縄古語大辞典』（角川書店　一九九五年）の「しろざばね」の項に「白い差羽。羽が生えることは長寿を表す。」とある。

5 『与論方言辞典』（武蔵野書院　二〇〇五年）に「①（貝）ヒザラガイ。②老人の顔にできるしみ。」とある。

6 『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店　一九九九年）は、和歌に詠まれる「老い」は、南北朝時代の歌学書『和歌題林抄』の「老人」の項に「すべてことに触れて昔をしのび、盛りを思ひ出で、鏡の影を見て知らぬ翁かと驚き、立ち居

の苦しきにつけて、終はりの近づけるを悲しみ、長柄の橋に寄せてふりぬることを愁へ、夜深き寝覚めの心などを詠む」と示されている通りであるとしている。

7 ウムイの対訳は、外間守善・比嘉実・仲程昌徳『南島歌謡大成Ⅱ沖縄篇下』（角川書店　一九八〇年）によるものである。

8 用例に用いた琉歌と歌番号は池宮正治氏の「『琉球大歌集』と『南苑八景』　―補完と全貌―」（『日本東洋文化論集』第四号　一九九八年）によるものである。

9 「老恋」題で詠まれた琉歌に、明治四一年二月一一日付『琉球新報』掲載の名護琉歌会詠草、明治四二年六月八日付『琉球新報』掲載の戊申琉歌会詠草、明治四五年七月三日付『沖縄毎日新聞』掲載の糸満琉歌会詠草がある。

10 「老人恋」題で詠まれた琉歌に、明治四二年八月一六日付『琉球新報』掲載の奥武山琉歌会詠草、明治四四年一〇月二一日付『琉球新報』掲載の西森社詠草、明治四五年七月二二日付『琉球新報』掲載の糸満琉歌会詠草がある。

11 「老人初恋」題で詠まれた琉歌に、明治四三年七月二〇日付『沖縄毎日新聞』掲載の日曜会詠草がある。

12 東恩納寛惇『南島風土記』（沖縄郷土文化研究会　一九五四年）の「名護町」の項。

13 見里朝慶『琉歌の研究』（文教商事　一九八九年）一八五頁。

14 島袋盛敏・翁長俊郎『標音評釈　琉歌全集』（武蔵野書院　一九六八年）四五番歌評釈。

15 『琉歌全集』二〇一番歌評釈。

16 『琉歌集　春の部』（琉球大学附属図書館伊波普猷文庫蔵）では「こきゆん」と表記されている。『古今琉歌集』が「クジュン」（漕ぐ）を「こしゆん」と表記したことから誤って理解されたものであろう。

17 玉城政美氏はトゥバラーマの「老い」を「①老いの自覚、②若さを保ちたい、③若さに戻りたい、④老いても若い気持ちを保とう、⑤元の若さに戻れない、⑥老いたら行動力がなくなる、⑦老いても楽しく生きよう、⑧老いて死ぬ空しさ」に分けている。(『琉球歌謡論』(砂子屋書房　二〇一〇年)

18 台湾大学蔵『琉歌大観』(巻二第六輯)には「こゝろあらたまの年やかさねても恥つかしやわ肝いつもわらべ」とある。「肝かしやや」の用例は他にはなく、「恥かしやや」の誤伝であろうか。

19 『琉歌の研究』三二三頁。